SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

国語科単元構想の開発過程における実践的知識の解明と実践の評価

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 髙木, 由香 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010220

国語科単元構想の開発過程における実践的知識の解明と実践の評価

髙木　由香

Clarifying Practical Knowledge in the Development of the Unit-Planning Process in Japanese Language Classes

Yuka TAKAGI

1　問題の所在

教師は一人で成長するのではなく、先輩教師をはじめとする同僚教師から互いに学び合い成長している。教師間の協働的な研修が授業力量形成に深く関与し、校内授業研修の充実が教師の授業力向上に影響を及ぼすことが指摘されている（秋田 2008，木原 2004)。しかし、その授業研究は全国的に認知され、どの学校においても実施されているが、機能していない場合も多いという実態がある（秋田 2008)。その要因の一つとして、教師の多忙化があげられる。教師の多忙化について姫野（2012）は、「家庭や社会からの要望が増え続け、学校や教師が担わざるを得ない領域があまりにも拡大しすぎており、多忙化等の問題が深刻化している」として、教師の多忙化が教師の授業力量形成に負の影響を与えていることを指摘している。研修の時間が十分に取れず、校内研修は形骸化しつつある。

二つ目の要因は，学校を取り巻く環境の変化として、近年の教員の大量退職、大量採用の影響により、教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始めていることがあげられる。例えば、平成 25 年度の学校教員統計調査によると、中学校において，他の経験年数を有する教員に比べ、経験年数 5 年未満である教員の割合が最も高く（約 20%)、経験年数が 11 年～15 年であるいわゆるミドルリーダークラスの教員の割合（約８％）のおよそ 2.5 倍となっている。よって、かつてのように先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況があり、継続的な研修を充実させていくための環境整備を図るなど、早急な対策が必要となっている（中央教育審議会 2015)。

さらに、教科内容で踏み込んで言えば、国語科の「言語活動の充実」を目指す授業の在り方についてである。これからの社会の変化を踏まえ、国語の授業もまた大きな変革の時を迎えている。国語科の勉強は好きではない，授業の内容がよくわからないという子どもたちも多い（全国学力学習状況調査　児童質問紙)。国語科の授業で何をどう教えたらよいのか、どういう授業をしたらよいのかと国語科に苦手意識をもつ教師も多く、研修の機会とその充実が求められている(学習指導基本調査 2007)。

以上のことから，授業力量形成を図る効果的な校内研修体制及び，内容の検討・改善が喫緊の課題であることは言うまでもない。

2　研究の目的

本研究では，国語科の単元構想の開発の過程で教師はどのような実践的知識を使って単元を構想し、実践、評価しているかを実証的に明らかにすることを目的とする。教師が知らず知らずに行っている暗黙知に基づいた、単元構想、授業展開について検討していく場面を、いったん立ち止まり省察することで、自身の思考の枠組みを組み替えていくことが可能となると考えるからである。このことを明らかにすることで、国語科の授業改善や教師の授業力量形成、また、校内研

修の効果的な在り方の示唆につながる可能性を開くことができると考える。

具体的には、第１に、自身の国語科単元構想開発の過程を明らかにすること、第２に授業実践からその単元の効果を明らかにし、単元レベルで授業研究を推進すること、第３に第１と第２の研究結果を踏まえ、教員の研修プログラムを開発してその効果を還元すること、加えて研修の成果を生かしワークショップ型の研修を開発し、「やまなし」の単元構想開発過程における実践的知識を明らかにしていくことである。

３　研究の方法（概要）

研究Ｉとして、小学校国語科の文学教材（宮沢賢治作品）を対象に、宮沢賢治の世界観を深くとらえ概念の拡張を図ることを目指した自身の単元開発の過程を、詳細に記録をとってまとめ、明らかにする。

研究Ⅱでは、アクションリサーチ校の小学校６年生のクラスで授業実践を行い、その単元構想開発の効果がもたらされたかを実践で検証する。

研究Ⅲでは、Ｆ市内の教員が集まって行われた研修会において、「やまなし」の単元構想作成をテーマとする演習を行い、単元構想作成過程を発話データや作成した単元構想図などを分析することで検証していく。

３－１　研究Ｉの方法

作者である宮沢賢治の人物像や「やまなし」の作品の背景、様々な研究者等の「やまなし」の主題の捉えや特徴的な文章構造など、多くの文献にあたって調べたり、文学教材の深い読みを起こす教授方略を追究したりして単元構想を作成していった。また、大学院の担当教員とも議論し検討を重ね、単元構想作成の過程の記録を詳細に整理し、自身の単元開発の過程を明らかにした。以上のプロセスは、筆者自身が記録を記述しまとめた。

３－２　研究Ⅱの方法

アクションリサーチ校である小学校の６年部において、平成28年６月１日から６月17日まで、国語科「やまなし」の授業を学年部研修として６年部と協働的に研修を進めていった。６月 15 日には研究授業として授業公開し、教職大学院生 24 名も参観した。授業中の子どもの表れやワークシートなどのポートフォリオを基に深い学びが起きているかを検証していく。また、自身の授業省察記録を丁寧に整理していくことで、単元の効果を明らかにしていく。

３－３　研究Ⅲの方法

Ｆ市教育委員会･静岡大学連携公開講座として実施された教員研修プログラムの一つである「コンピテンシー・ベースの授業開発、実践とその評価」（平成 28 年８月１日実施）を対象として、単元デザイン作成プロセス等に関するデータを収集する。

この講座の具体的な展開は、小学校国語科「宮沢賢治『やまなし』」（光村図書　６年）の単元デザインの作成をテーマとする演習形式である。

収集するデータは、(1) 個人で思考した単元デザインに関するデータ（付箋紙に記述されたデータ）、(2) 各グループによる単元デザイン作成過程の発話記録、(3) グループごとに作成され、ワークシートに記述された「やまなし」の単元デザインである。データの収集に関しては、本研修へ実習の一環として参加した教職大学院生の院生７名が８つのグループを担当し、グループになってからの単元デザイン作成の活動プロセス（45 分間）をＩＣレコーダーで記録した。そして

後日、発話記録としてデジタルデータとして起こし、検討、分析を行った。

４　研究結果

４－１　概念の拡張を図ることを目指した「やまなし」の単元構想の開発（研究Ⅰ）

「やまなし」の作者である宮沢賢治の人物像や、作品の背景、様々な研究者等の「やまなし」の主題の捉えや特徴的な文章構造など、多くの文献にあたって調査し、それを踏まえ、文学教材の深い読みを起こす教授方略の検討を通して単元構想を作成していった。

図１は、筆者が「やまなし」の単元を構想していく際の流れを整理し、構造化して図に示したものである。単元を構想するにあたり、【ａ：教材研究】【ｂ：単元開発の視点】【ｃ：単元計画】の３つの段階を経て授業実践に移っていることが明らかになった。

【ａ：教材研究】では、「宮沢賢治の人物像」「作品の背景」「宮沢作品教材化の歴史」「文章構造の理解」「主題の様々な捉え」について研究が行われていた。

【ｂ：単元開発の視点】では、「学習指導要領」や「教師の願い」を受けて「単元の目標」を設定し、それを基盤として、様々ある教授方略から「内容理解のための視点」「段階的な読み」「単元構成の枠組み」を取り入れて、単元の方向性を設定した。

【ｃ：単元計画】では、まず物語の「構造」を捉え、「５月の世界 12 月の世界」をイメージし、「主題」に迫っていく。「作者について」の視点をもち、本文の読みと作者の生き方・考え方とを関連付けて「再解釈」する。「学びの活用」としては紹介文を書く、といった具体的な単元計画が作成された。

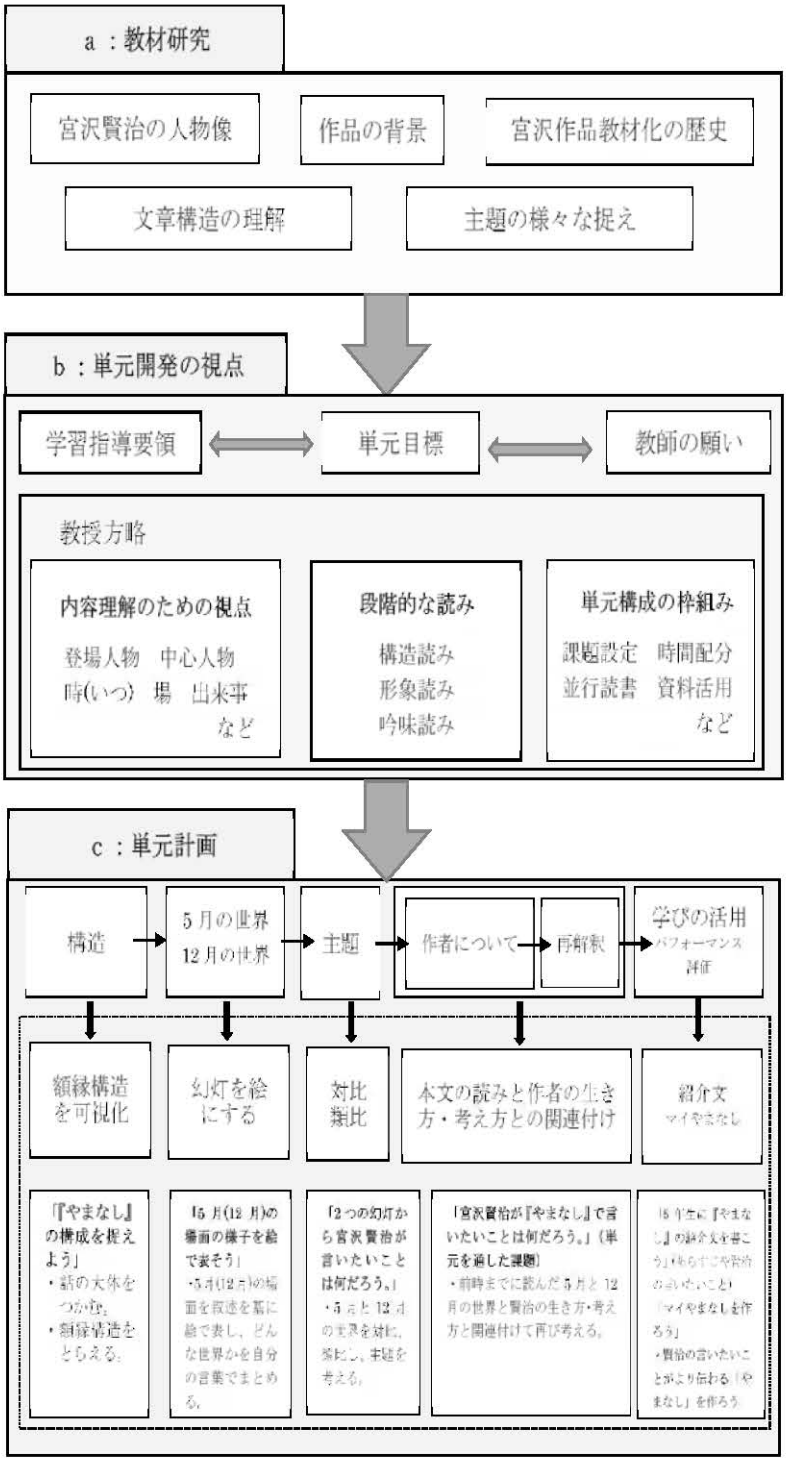

図１　「やまなし」単元構想開発の過程

以上のように、単元構想を作成するには、まず、作者の人物像や作品の背景を捉え、文章構造の特徴に目を向け、主題をどう捉えるか考えるなどの教材研究が行われること。それを踏まえ、学習指導要領や教師の願いを受けて単元の目標が設定され、時間配分などを加味しながら読みが深まるための教授方略を取り入れていくこと。さらに、それらを具体化して単元目標を達成できるような単元計画を立てていくといった単元構想作成の過程が明らかとなった。

４－２　深い読みを促す「やまなし」の授業実践（研究Ⅱ）

作成した単元構想のもと、アクションリサーチ校であるＨ小学校６年部において、国語科「やまなし」の授業を学年部研修として６年部と協働的に授業実践を行い、宮沢賢治の世界を深く捉え概念の拡張を図ることによって深い学びをもたらすことができるかを検証した。６月１日から表１で示した単元計画(10 時間扱い)で「やまなし」の授業を行った。

表１　「やまなし」の単元計画

	時間	学習活動
第一次	第１時	「やまなし」を読み、宮沢賢治とその作品に対する興味を高める。
	第２時	作品の全体構成をとらえて「やまなし」の大体を読み、学習の見通しをもつ。
第二次	第３時	5月の場面を、叙述を基に絵（図）に表して整理する。
	第４時	5月の場面について全体で話し合い、5月はどんな世界なのかを自分の言葉でまとめる。
	第５時	１２月の場面を、叙述を基に絵（図）に表して整理する。
	第６時	12月の場面について全体で話し合い、12月はどんな世界なのかを自分の言葉でまとめる。
	第７時	5月と12月の場面を対比し、2つの幻灯から宮沢賢治が言いたいことは何かを考え、自分の言葉でまとめる。
第三次	第８時	宮沢賢治の生き方、考え方を知る。
	第９時	宮沢賢治の思いを自分の言葉でまとめる。
	第10時	宮沢賢治作品「やまなし」の紹介文を書く。

第一次では、「やまなし」を読んでいくための土台作りとして物語の構成(額縁構造)や登場人物などを捉えて話の大体をつかんだ(第２時)。

第二次では、主題に迫るため本文を読み深めていった。まず、５月と 12 月の場面を叙述を基に絵で表し(第３、５時)、それぞれがどのような世界なのかを自分の言葉でまとめた(第４、６時)。５月と 12 月の２つの場面を対比・類比することで、２つの幻灯から宮沢賢治が言いたいことは何かを考え、主題に迫っていった(第７時)。第三次では、他の２つの宮沢賢治の資料を読んで賢治の生き方考え方を知り(第８時)、前時までに読んだ「やまなし」の５月と 12 月の世界と関連付けて「宮沢賢治が言いたいことは何か」を再解釈し、自分の言葉でまとめた(第９時)。また、学びの活用として、５年生に向けた「やまなし」の紹介文(第 10 時)やパフォーマンス課題として５月と 12 月の他に○月の話を加え、賢治の言いたいことがより伝わるような「マイやまなし」を書いた。

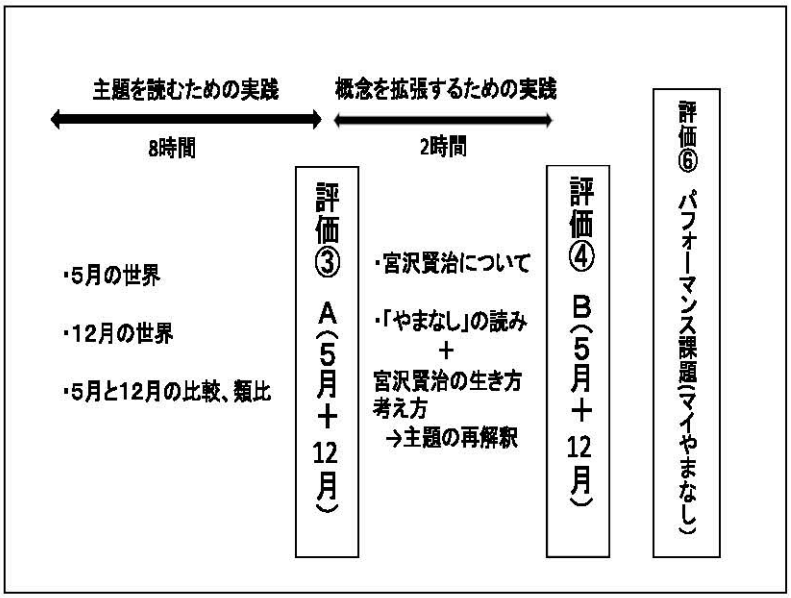

図２　概念の再解釈を図った効果を見るための評価の位置づけ

10 時間の「やまなし」における子どもの学びの評価は、授業中の子どもの表れや子どもたちのポートフォリオやパフォーマンス課題を分析して、単元レベルにおける実践の成果と課題を明らかにしていった。特に、今回の分析では、宮沢賢治の言いたいこと（主題）に迫るため、5月と 12 月の場面をそれぞれどんな世界かを考えてから２つを統合して宮沢賢治が言いたいことは何かを考えたこと、また、宮沢賢治に関する２つの資料を取り入れ、「やまなし」で読んだことと宮沢賢治の生き方考え方を関連付けて概念の再解釈を図ったことは、深い学びに到達するために有効なのかをデータを基に検証していった（図２）。

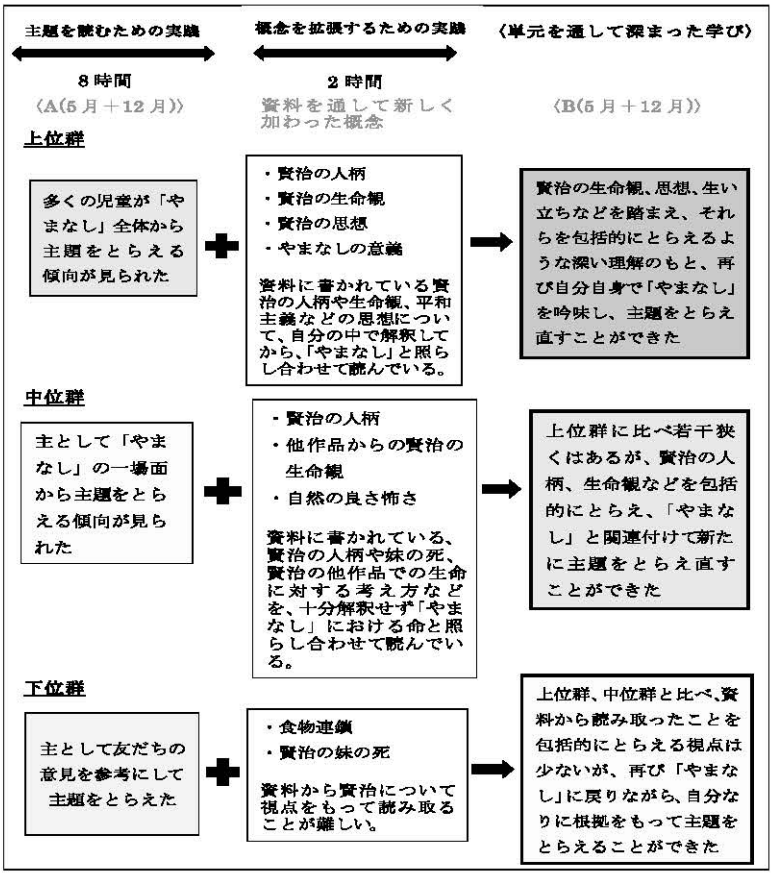

図３　各群の「やまなし」の学びの過程

図３は各群の「やまなし」の学びの過程をまとめたものである。

上位群は、資料を関連付けて主題を考えることにより、賢治の人柄や生命観、平和主義などの思想について包括的に自分の中で解釈し、さらに主題についてのとらえ直しをして考えを深めることができたと言える。また、豊かな表現でその考えを記述することができ、概念の拡張を図ることができたと言えるであろう。

中位群は、主題のとらえ自体が資料を関連付ける前と後で変化している。資料を関連付けることにより、資料に書かれている、賢治の人柄や妹の死、賢治の他作品での生命に対する考え方などを、上位群ほど十分に解釈はできないまでも「やまなし」における命と照らし合わせて読んでおり、自分の考えを宮沢賢治の考えと合わせてとらえ直すことができた。しかし、概念を拡張するような解釈までは難しく、また上位群に比べ語彙があまり豊かでないために、とらえた主題の表現は上位群に比べ評価が高くなかった。

下位群は、「やまなし」からだけの読みでは自分自身で主題を捉えることが難しく、友達の意見を参考にして主題を捉えていたが、資料を関連付けて考えたことにより、再び「やまなし」の本文に戻りながら資料からわかることと合わせて自分の言葉で根拠とし、主題を捉えることができた。しかし、資料を包括的にとらえることは難しく、概念の拡張は見られなかった。また、言葉としても表現としても豊かな記述は見られず、評価にもつながらなかった。

４－３　単元構想作成過程を構成する実践的知識の検証（研究Ⅲ）

市内の教員を対象にした小学校国語科「宮沢賢治『やまなし』」（光村図書　６年）の単元構想

作成をテーマとする演習を行った。教員 42 名を８グループに分け、各個人が単元構想に関するアイディアを記述した付箋をもとに、班ごと単元構想を作成した。８つのグループの単元開発のうち、３グループ（以後 A、B、C 班とする）を対象に、単元構想作成過程においての発話を記録し、分析を行った。

その結果、表２に示したように、「教師の教材解釈」「課題設定」「場面の比較読み」「資料の扱い方」など、21 の国語科における実践的知識の概念が抽出され、「Ⅰ：教材研究」「Ⅱ：単元開発の視点」「Ⅲ：具体的な単元計画」「Ⅳ：その他」の４つのカテゴリーに整理された。筆者自身が「やまなし」の単元構想を開発した時と同じように、教師が教材と出会い、教材研究を始めてから単元構想を完成させるまで、多くの実践的知識が使われていることが明らかとなった。

表２　国語科単元構想開発過程で抽出された概念

カテゴリー		概念	定義
Ⅰ 教材研究		①教師の作品解釈	「やまなし」を読んだ教師の作品の解釈や捉え
		②作者について	宮沢賢治についての知識や作風についての考え、意見
		③文学的な主題の捉え	「やまなし」を通して作者の言いたいこと
Ⅱ 単元開発の視点		④目標設定	「やまなし」の単元目標
		⑤読みを深める具体的な手立て	単元目標を達成するための授業の手立て
		⑥単元の展開	「やまなし」の単元の展開についての検討
		⑦授業時数の配当	授業時数についての調整・検討
		⑧読みに対する子どもの実態	子どもが作品を読むにあたっての実態
Ⅲ 具体的な単元計画	物語を読んでいくための土台作り	⑨話のあらましの確認	「やまなし」を読んでいくための基本的な設定の確認
		⑩初発の感想・疑問	「やまなし」を読んでの子どもの感想・疑問の扱い方
		⑪題名読み	題名からどんな作品かを考える
	本文を解釈し、主題を捉えるための方略	⑫課題設定	主題に迫るための課題の検討
		⑬表現の工夫	「やまなし」の中の表現の工夫についての捉え
		⑭絵による可視化・イメージ化	6 月と 12 月の場面を叙述から絵にしてどんな世界かをイメージする手立てについて
		⑮場面の比較	主題を捉えるため、5 月と 12 月の世界を比較して読むことについての検討
		⑯中心人物（かに）の気持ち	中心人物のかにの気持ちについて
		⑰資料の扱い方	宮沢賢治の資料をいつ、どう扱うかの検討
		⑱題名の理由	なぜ「やまなし」という題名なのかを考える
	学びの活用	⑲他作品に触れる	「やまなし」で読んだことを他の宮沢作品で活用することの検討
		⑳並行読書の導入	「やまなし」以外の宮沢作品を読むことについて
Ⅳ その他		㉑その他	話し合いを進めるための促しや相づちなど

５　総合考察

本研究においては、国語科の単元構想の開発過程で、教師はどのような実践的知識を使って単元を構想し、評価しているかを実証的に明らかにした。

授業実践においては、概念の拡張を図ることを目指した単元構想の開発を小学校国語科の宮沢賢治作品「やまなし」で行い、他の資料を関連付けて考えて概念の再解釈を図ったことにより、深い学びを促す成果が見られたことが確認できた。この「やまなし」での概念の拡張を図るための試みは、「やまなし」だけにとどまることはない。例えば、同じく国語科の教材となっている宮沢賢治作品の「雪わたり」や「注文の多い料理店」でも応用可能となると考えられる。教材文で読んだことをさらに他の資料と関連付けることで、教材文を再解釈し概念を拡張するという考え方を、今後、単元開発で取り入れることによって、深い学びにつなげていくことが可能であると考える。

また、今回明らかにした国語科の単元構想開発過程における実践的知識は、国語科文学教材の授業を構想するにあたり、どんなことをどんな流れで研究、検討していったらよいかの視点を与えることはもちろん、説明文や他の教科の単元開発に向けての示唆を与えている。また、校内研修の効果的な在り方や、さらには、国語科の授業改善、教師の授業力量形成にもつながっていく可能性を開くことができると考えている。

＜主要参考文献＞

阿部昇，2015，『国語力をつける　物語・小説の「読み」の授業』，明治図書